

草が木に敗れたものがたり
—御伽草子の世界—

(公財) 日本植物調節剤研究協会
技術顧問

森田 弘彦

その昔に、国中の植物が木と草に分かれて戦争をしたことがあったそうで、その様子が江戸時代に「草木太平記」として刊行され、これが1926年に有朋堂文庫の一冊、「御伽草紙」の中の一編として活字化された。校訂者の藤井紫影氏は「御伽草紙」の「緒言」でこの物語を以下のように要約した。

吉野の里近き一むら薄、八重櫻の花の姿を籬の隙に見そめしより、色深き戀となり、小萩を仲立として言ひ寄り、いつしか花の下紐打解けて、草の枕をとりかはしたるに、梅聞きて大に怒り、薄が野邊に火をかけて焼き拂はんと、一味の木を勢を催せば、薄も草の一類を集めて相戦ひ、互に勝敗ありしが、楠の木に加勢に薄敗北して、はら一文字に搔切つて浅茅が原の露と消えにしかば、櫻は花の衣を改めて墨染となり菩提を弔ひしとなり。

八重桜に恋焦がれたススキが思いあぐねているところに小萩が手を差し伸べた。ハギがススキの側に立って恋の仲立ちをしたのは、万葉集で山上憶良が秋の七種(草)の筆頭にしていた以来、ハギを草と扱ってきた経緯があると思われるが、これが低木であることから木に話を通じやすいとみられたのかもしれない(ヤマブキ、ボタン、アジサイなども「草」にくみした)。とにかく、ススキは2度にわたって無視された八重桜から、ハギのおかげでようやく下記の色よい返事を得て想いを果たした(図-1)。

いろいろに花のたつみはつらけれど今はしのぶの草結びせん
ウメが大いに怒ったのは、八重桜とは「・・・梅のかをる大將に匂も深く相馴れて候へば・・・」との関係にあったからで、ススキに対しては逆恨みといえる。ともあれ、ススキは草の本拠地武蔵野で同志を募って梅に率いられる木軍に立ち向かうが、主戦場はどうやら京の都であつたらしい。物語には、たくさんの植物名が登場するが、それらは戦士としての場合と掛け言葉や洒落を含めた修飾語としての場合がある。例えば、木軍の大將ウメや草軍のオミナエシはもちろん戦士で、彼らのいでたちの解説にも植物名がちりばめられた。

ウメ：楊梅桃李の腹巻に、梅のこだちを結んでさげ、紅梅月毛の馬に乗り、素槍おつとり出でられたり。

オミナエシ：忍ぶ文字摺たかにとつて付け、ゑんどうの弓を横たへ、黒駒に董の手綱をかけられたり。

とにかく天下分け目の合戦で、全国の松、桜や紅葉の名所から銘木の類はもちろん、宇治の茶園のチャの木などもこぞって木軍に合流し、一方、セリ、ナズナの春の七草を筆頭に、「われわれ潮瀬に年をふるとても、流れは同じ草なれば・・・」

と藻塩草、つまり海藻までもが草軍に加わった(表-1)。アサガオ・ヒルガオ・ユウガオのつる草が、テイカカヅラ・ツタ・サネカヅラなど藤本を従えた老松大將に挑んでかなわず、「同じ枕に討死にして夕顔の露とぞ消えにける」となる。渡来が明治時代以降とされるヨルガオは、さすがにこの合戦には出てこない。

戦局は次のように草軍の優勢で進んでいたようである。

さる程に草は緑の色をかがやかし、花(木)の袖をくさりつれ、敵の城を圍むこと七重八重に籬をゆふが如くなり。

木軍の劣勢を挽回したのは楠木(くすのき)の活躍で、この木のみ「楠木正成」という鎌倉時代から南北朝時代に実在した武将の人名で出てくる。

若き葉武者を百きばかり従へ、思ひもよらぬ敵の後より鬨をどつとつくりかけ、草の陣へ割って入る。・古木どもは是に力を得、再び花さく心地して、われもわれもと立ち返りここをせんとと戦ひける。

これを転機に木軍が主導権を握り、その結果草軍は劣勢に陥り、「もはやこれまで」と打って出たススキは自害して果てる。

無慚や薄は花籠の花の如く穂をいづべきやうもなし。今はこれまでとや思ひけん、跡とひ給へ刈萱の道心ばらといふさまに、はら一文字に搔き切つて、浅茅が原の露とぞ消えにける。

クスノキの大活躍があつての木軍の勝利であるが、合戦が長引いて秋から冬にかかれば、草にとっては勢いの尽きること、自明であつたらう。冒頭にあるように、八重桜は「墨染

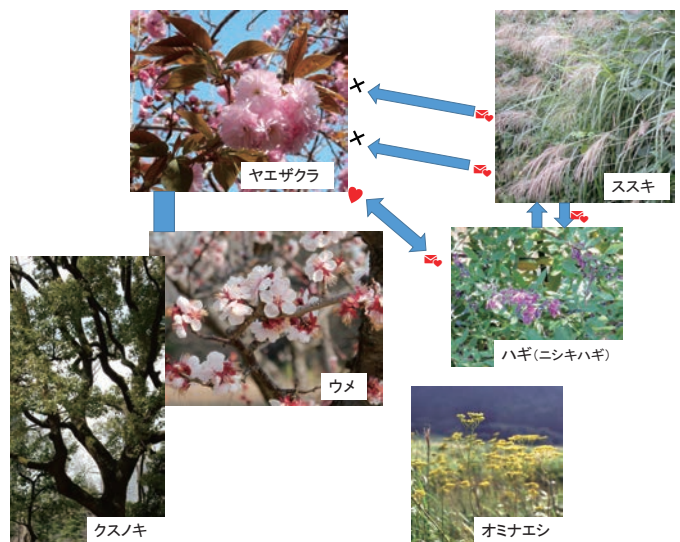


図-1 「木」と「草」の合戦をめぐる相関図

表-1 草・木軍の主要な参戦者名簿

参戦した「草」	現代の名	参戦した「木」	現代の名
薄(総大将)	ススキ	梅(薫る大将)	ウメ
芹	セリ	(浪華の梅)	
薺	ナズナ	櫻(鞍馬の雲珠櫻)	サクラの仲間
五形	ハハコグサ	(大原や小鹽の花)	
たびらこ	コオニタビラコ	(嵯峨, 仁和寺, 御室の花)	
佛の座	ホトケノザ?	(小原, 賤原, 宇治, 醍醐, 伏見, 木幡の山櫻)	
鈴菜	カブ	(越後櫻)	
すずしろ	ダイコン	(信濃櫻)	
小萩	ハギの仲間	(伊勢の國 神路山の櫻)	
井手の山吹	ヤマブキ	(昔を忍ぶ志賀の櫻)	
をみなへし	オミナエシ	(若木の櫻)	
深見草	ボタン	(南殿の櫻)	
芙蓉	フヨウ	松(松の大将)	マツの仲間
芍薬	シャクヤク	(加賀の國に安宅の松)	
しもつけ	ソモツケ	(志賀唐崎の一寸松)	
紫陽花	アジサイ	(名も高砂の松)	
けしの花	ケシ	(墨の江の松)	
紫苑	シオン	(五葉にたつは子の日の松)	
龍膽	リンドウ	紅葉(龍田川の神木)	モミジの仲間
藤袴	フジバカマ	(むら紅葉)	
桔梗	キキョウ	(稲荷の薄紅葉)	
岩藤	イワフジ	(通天の紅葉)	
櫻草	サクラソウ	(小倉, 高尾の紅葉)	
駒つなぎ	コマツナギ	楠木	クスノキ
忘れ草	ヤブカンゾウ	柳	ヤナギ
鶉草	ゼニゴケ?	さつき	サツキ
大和撫子	カワラナデシコ	桃花(西玉母)	モモ
唐撫子	セキチクの仲間	百日紅	サルスベリ
石竹	セキチク	綾衫	スギ
萱草	ノカンゾウ?	玉椿	ツバキ
水仙	スイセン	朝倉の宰相	サンショウ
鳳仙花	ホウセンカ	栗	クリ
ぎぼうし	ギボウシの仲間	かき	カキ
姫百合	ヒメユリ	漆の木	ウルシ
美人草	ヒナゲシ?	ひ	ヒノキ
からあやめ	アヤメの仲間?	楊梅	ヤマモモ
紫蘭	シラン	杏	アンズ
河原の大黄	ギンギシの仲間	すもも	スモモ
虎杖	イタドリ	九年母	クネンボ
しのね	ギンギシの仲間	えのみ	エノキ
唐蓼	オオケタデ	棕の木	ムクノキ
毛蓼	タデの仲間	くるみ	クルミ
犬蓼	イヌタデ	椽	クスギ
兔のこ草	エノコログサ	茶(宇治の茶園のチャの木)	チャ
杉菜	スギナ	定家葛	テイカカズラ
木賊	トクサ	薦かつら	ツタ
難波津の蘆	アシ	さねかつら	サネカズラ
杜若	カキツバタ	ぶどう	ヤマブドウ?
早苗	イネ	棕櫚	シュロ
朝顔	アサガオ	銀杏	イチヨウ
昼顔	ヒルガオ	蘇鐵	ソテツ
夕顔	ユウガオ		
菊(白菊の大将)	キクの仲間		
(春菊)			
(夏菊)			
(寒菊)			
(狸々紅菊)			
仙翁花	センノウ		
小豆の大納言	マメ		
小麦のわらべ	コムギ		
秋の茄子	ナス		
鬼百合	オニユリ		
鬼薊	アザミの仲間		
刈萱	メガルカヤ		
藻塩草(櫻海苔)			
(海松)			
(和布)			
(青海苔)			
(大あらめ)			
(ひじき)			
(ふのり)			
(あまのり)			
(雞冠海苔)			
(ぼんだはら)			

め桜」となって出家し、物語は終わる。

「草木太平記」には実に多種多様な草木の名前が登場し、戦士としての場合はもとより修飾語として使う場合にも、それぞれの植物の特徴がうまくつながっているため、この作者は当時の植物に関して豊富な知識を持っていたに違いない。

物語にはウメやボタンを筆頭に多くの渡来種が登場する。中でも、草軍のホウセンカはインド方面の原産とされ、室町時代中期には日本の書物に登場するようで、江戸時代には観賞用としてのほか、「魚の肉の如き物を煮るに、子(種子)を数粒入れれば、やはらかになる。魚の骨ののんどにたちたるに此実を服すれば、しるしあり。(貝原益軒「花彙」1694, 八坂書房 1973 版)」との用途もあり、また、常陸国土浦藩の町方が幕府からの依頼に応じて産物を調査・記録した中にも「本うせんく王(ホウセンクワ)(須田直之「250年前の植物群像 享保20年内田家文書「日記」より」2005)」とある。新潟県中越地方のむかし話で、「継母に疎まれ、桶に入れられて山奥に埋められる姉に、妹がホウセンカの種子を渡して桶の穴から落とさせ、庭にその花の咲くのを見計らって山道の花をたどり、姉を助け出す。(お玉とお次「水沢謙一 おぼの昔ばなし」, 1976)」という役割も演じた。渡来種のホウセンカが、草軍に参じるほどに植物仲間や日本の人々に十分になじんでいたことがわかる。

人間の姿をした植物の活躍を描く物語は日本には結構あったようで、Web 検索ではいくつかの関連する論文も出て来る。「草木太平記」は末尾で、以下のように「人間にたがふこと一つもなし」と訴えている(【 】内が擬人化)。

「種を蒔きそめしより芽【目】をひらき、同じく花に匂ひをとどめ、口なしといへども葉【歯】もはえ、聲なしといへども一節【曲調】あり、耳なしといへども物をきくらげの耳がましき【聞く】をば初めとして、手には手拍あり、おのれおのれに股もあれば、おぼのふぐりも下がれり、欲なしといへども物をみどり【看取り】にする縁も備はり・・・」

草が木に無念の敗北を喫してから幾星霜経過したのかかわらないが、人々と雑草との戦いはさらに続くので、山形県の南部にあるという草木供養塔にならって、「草魂慰霊碑」を考える時期なのかもしれない。